

グリム童話考現学

——グリムをめぐる現象学改題——

1

二十世紀が終わろうとする今、グリム童話に関心が集まっている。私たちが知ってるつもりだったことが、信じていたことがゆらぎはじめたことと無関係ではなからう。新刊書籍の広告や帯文には、「本当は……」というフレーズがならぶ。ただし、これは日本という特殊な読書市場でのことであり、おなじような現象が、七〇年代のリバイバルであるノストラダムス大予言テーマでも起こっている。日本でだけ。いつかくる二度目の関東大地震や大恐慌、それにもなう日本経済の大崩壊であるとか、この国のマスコミはよほど将来不安をかきたてないと売れないというセオリーが定着しているらしい。こん

天 沼 春 樹

なに平和でいい景気が長つづきするわけがないという、貧乏性のメンタリティーとでもいおうか、そのくせ長期的視野にたったものの見方ができず、場当たりのその日を送っているようにしかみえない。その良い例が、沸き起こっては、あっというまに終息する様々なブームであろうか。洪水のようにやってきて、土壌を荒らし、過ぎ去っていく。定着しない。蓄積されない文化。それが、現代日本の擬似文化現象である。だから、グリム童話がもてはやされたところで、グリム童話への理解が深まるとか、なにがしか文化として蓄積されるとは思えないのである。『ほんとうは恐ろしいグリム童話』（桐生操著）も、ホラー趣味の流れのなかで、『リング』や『らせん』（鈴木光司著）と同様に消費され、消化され、排泄され

るだけ。決して吸収はされない。ある種のデフォルメされたイメージがしばらくのあいだグリム童話にまわりつき、それを払拭するのに長い月日がかかる。払拭しようという意欲があればの話だが、義理も義務も良心も希薄になった現今、難しいところである。

グリム童話をめぐる現象をおいにかけてきて興味ぶかいのは、八十年代前半から九十年にかけて、アメリカのゲルマニスト・グループで盛んに行われ、日本にも翻訳がいくつかでた所謂フェミニズムの側からのグリム童話バッシングと今回のブームの比較である。マリア・タタールの『グリム童話——その隠されたメッセージ』や、ジョン・M・エリスの『一つよけいなおとぎ話』、ジャック・ザイプスの『グリム兄弟、魔法の森から現代の世界へ』などが代表的な著作である。おおかたはグリム童話の脱神話化、近代市民男性社会批判の意図が、歴史的事実とまぜこぜにされているので、注意深く読みながら、日本の研究者にありがちな外国論文鵜呑み受容に陥らないように苦労したものである。ドイツの学者にしる、アメリカの学者にしる、強引で、なにをいっているかわからない連中もいるわけで、あのなんだか暗号みたいな序

文はなんとかならぬのかという思いはここ二三十年ずっとつづいている。

曰く、「グリム童話の女性たちは、初版から版を重ねるたびに口数がすくなくなっていく、消極的に男性による救いをまわっているのが理想とされていた。男性にとっ

ては禁忌(タブー)を破ることは成功の第一歩となるが、女性にとっては罰をうけるだけのこととなる」といった傾向がグリム童話にはあるのだそうである。女性 は 家庭的で、男性のいいなりになるのが理想という近代市民社会の男性原理を色濃く反映した書き変えがグリム兄弟によってなされたのだと。陪審員にむかってまくしたてる検事よろしく、グリム兄弟に対する欠席裁判が行われた。法廷には弁護士も来ていなかった。ドイツのグリム学者たちは陰ではぶつぶついていた気配があるが、きっちり反対証言をした者もおらず、なかには、アメリカのゲルマニストはほとんどユダヤ系で、その怨念がグリムにむけられているんだと、どうかと思うような陰口も聞かれたものである。

しかし、この検事たちの声は、陪審員には無視され、誰もグリム童話フェミニズム的批評からグリム童話を読

み返してみようと思わなかった。日本のゲルマニストたちも尻馬に乗って類書や啓蒙書を読書界に送り出そうとはしなかった。仲間うちではみんな周知のことだったし、自分で発見したわけでもなかったから。誤解かもしれないが、論文は別にして、人の禪で相撲をとるようなはしたないまねは慎むというのが、日本のゲルマニストの傾向のようで、その過度な慎み深さが、現在のドイツ語ジャーナル路線の一因のようにも思えるのだが、これはまた別話である。私などは、書評や雑誌記事などをすこし書いてだけで、「君、最近グリムでだいぶ儲けているらしいね」などと学会の懇親会で厭味をいわれたくらいで、おそれいって以来学会から足が遠のいた。下らない。

それから、十年ほど後の現在、まさに二十世紀のどんづまり、銀行が破綻し、終身雇用神話もくずれ、右肩あがりの経済成長がとまってしまった眼の前真暗な日本で、ゲルマニストではなく、たぶんドイツ語も読めない（いっこう構わないが）はずの歴史オタクの二人の女性が、八十年代にどっさり出たグリム研究書を隔々まで読破して、「メルヘンが本当は怖くて残酷だったのだ」と、いまさらのように「発見」して、ベストセラーを狙う版

元から、解釈というよりはパロディー本を出版してミリオン・セラーになった。国民の約一パーセントが購入したことになるのだが、読後感を話しあっている現場であったことがないのは不思議である。ミリオン・セラーになると、大半は、買わねばならぬという脅迫神経だけで購入して、実は読まない人のほうが多いのだということとを編集者の何人かから聞いたが、資源の無駄ではないか。

2

グリム兄弟は、ヘッセン州、カッセルで図書館司書をしながら、古い書物や、彼らの友人や近隣の農民たちから昔話を集め、一八一二年に初版『子どもと家庭のメルヘン集』（グリム童話）を出版した。おりしも、ナポレオンに祖国ドイツを占領されていた時期で、ドイツの文化をまもり、残さねばならないという使命感もあった。ところが、生粋のドイツのお話を集めようとしたにもかかわらず、彼らのメルヘン集にはフランス起源のものや、ヨーロッパ各地にも類話のあるものがたくさん含まれていた。あたりまえの話である。人の交流がある以上、面

白い話、怖い話、不思議な話は口から口へと伝えられるものなのだ。ちょうど草花の種が運ばれ、根づくのと同じである。

初版グリムには、素朴な民衆の心が、粗削りな言葉で残っていた。子どもたちが豚の屠殺ごっこをして本当に仲間の体を切り刻んでしまったというような、今日からすればぞっとするようなお話もふくまれていたし、『白雪姫』の母親は本当は継母ではなく実母で、わが子を森に捨て、殺させてその内臓をたべようさえる。思わず眼をそむけたくなる所業である。けれども、メルヘンが恐ろしいとか、怖いとか大騒ぎするまえに、考えてみてほしい。メルヘンのなかの出来事よりも、何百倍も残酷で身の毛もよだつようなことを人間の歴史はくりかえしてきたのだ。メルヘンは事実にはとうていおいつかない。しかし、グリム兄弟もさすがに近代に生きる人たちがった。子どもと家庭のためにとうたった童話集に、このましからぬものは彼らの判断で削除したり修正を加えていった。民衆の素朴な言葉も、読み物としては粗野にすぎたので、しだいに文学的な文体に洗練させていった。産業革命以後の近代市民社会の子ども部屋で読まれるべ

き童話集のイメージが彼らのなかにあったのだ。その一方で、文献学者であった兄弟は、断片であった発掘土器を復元するように、メルヘンの形をととのえていったわけである。彼らが生きているあいだに七回も改訂し、筆をいれつづけたのはそのためだ。グリム童話第七版とは、グリム兄弟がこうあるべきだというメルヘンの最終報告といえるだろう。一九五三年の第七版で、昔話というよりは『グリム童話』というひとつのジャンルが完成したのである。

そして、グリム童話は *Es war einmal...* それは昔のこと、と始まるけれども、今でも起こりうる話として、身近にひきよせて考えることができる古くて新しいテーマをふんだんに備えているのである。赤ずきんを森のなかで誘惑するオオカミは、現代では渋谷のセンター街や大阪の夷橋近辺にだって現れるし、「国中でいちばん美しいのは誰？」という問いかけにこたえて、テレビという魔法の鏡は、さまざま美肌石鹸を提案しつづけている。十七歳の普通の少女が、あつというまにアイドルになって稼ぎまくることもある。

さて、こんな物言いはどうであろうか。

へ私たちは森をあるくとき、それぞれの個性でさまざまなものに眼をとめる。梢に鳴く小鳥たち、道の辺の花、木の葉のささやき、老木のきしみ、あるいは森そのものの薫り。森は大きくて、深いほどに神秘的で不思議な魅力たたえて私たちを待っている。グリム童話の魅力も、さまざまに入り口があって、いろいろな読み方をさせてくれる、謎めいた森であり、くめどもつきぬ泉のようなところにある。これは、ヴィルヘルム・グリムが好んだ文学的レトリックのパロディーにほかならないが、しかし、様々な解釈を可能にするというこの特徴は、この際重要ではなからうか。

解釈は自由であるし、その解釈の結果からみちびきたでされる結論というものは、スリリングな知的ゲームとして享受に値しよう。それが普遍的真理だとは言えないにしても。

ところが、ある一定の方向づけが初めにあり、その論理にあてはまる事例のみを抽出して論拠にしようという傾向がフェミニズム的にグリム童話を批評する際に目立っている気がしてならない。確かに歴史的に男性中心社会で、女性はあるゆる分野、局面で抑圧されてきた事実

はある。それは歴史的事実である。その社会で語られていた民話のなかにその反映があるのはあたりまえである。しかし、社会状況がさようであっても、おさえつけられない民衆の心や願い、もしくは本音は、どのように隠蔽しようとしても囊中の錐のように随所に突き出してくるものである。「グリム童話の女性は受動的で、男の子は勇敢で進取の気性に富む」(ルース・ボディックハイマー『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』)と、極めて一面的に断定して論じているのをみると、この人ほんとうにグリム童話二百一〇編を、まともに読んだのだろうかと疑いたくなる。そして、思わず知らず次のような「屁理屈」を捏ねたくなるのである。

3 グリム童話のたくましい女性たち

「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 15) を読んでみよう。⁽¹⁾ 貧しい木こりの夫婦が、飢饉で食べる物がなくなり、ふたりの子どもを森に捨てようとするのが、このメルヘンの発端である。だが、このお話、始めから終わりまで男性の影がうすい。まず、子どもたちを捨ててしまえと強硬に主張するのは母親である。母親が実母が継母かは

ともかく、はじめに決定をくだすのは女性である。父親は、いやいやながらそれに従ってしまう。子どもの生命にかかわるのに、まったく頼りがないし、危機管理能力もない。子捨てという行為の責任を女性に押しつけようという男性の悪意ある設定だと反論されるだろうが、それは「子捨て」「まびき」、さらに言うならば「姥捨て」という行為が窮乏した共同体のなかの緊急非難行為であることを無視した感情論にすぎない。口減らしは、共同体の危機管理的風習のひとつである。

さて、森へ捨てられることを知って、家にもどうとうと頑張るのは、最初は男の子のヘンゼルだった。小石やパンくずを道に落したり活躍しているようにみえるけれど、これはただ家にもどりたいという消極的な行為にすぎぬのではないだろうか。どうにもバイタリティーがあるとはいえない。魔女が住むお菓子の家におびき寄せられ、いったん捕まってしまうと、ヘンゼルはなすすべがない。せいぜい眼の悪い魔女をごまかす程度。お話の後半から、自分たちの運命を切り開くために俄然活躍しはじめるのは女の子のグレーテルだった。なるほど、初めはめそめそしていた彼女だが、魔女の小間使いとしてつ

らい仕事にたえ、チャンスを待っていた。パン焼きかまどにつきおとそうという魔女のたくらみをみぬき、ここぞというとき逆に魔女をかまどにつきとばしてやつける。グレーテルの闘争はすさまじい。

兄さんをたすけて、魔女のお宝をいただいて家に帰るときにも、川をわたるためにカモを呼んで、仕切るのはグレーテルのほうである。お話の前半と後半をくらべると、グレーテルのほうが試練をくぐって賢く、たくましくなっているのがわかる。グレーテルは確実にレベルアップして家に帰っていくのである。

「ラプンツェル」(KHM 12)

身重の妻が食べたいといったサラダ菜を、隣の家の菜園に盗みにいって、魔法使いの女、ゴテル婆さんにとっちめられた夫は、こともあろうに生まれ子どもを相手にわたす約束をしてしまう。生まれた女の子は、ラプンツェル(ちしゅ)となづけられ、森のなかの出口のない塔にとじこめられてしまう。成長して、髪の高い美しい乙女になる。毎日、塔の下でゴテル婆さんはよびかける。「ラプンツェル、ラプンツェル、おまえの髪をおろしておくれ」するとロープのように下りてきた髪をつか

んで老婆は上にあがっていくのだ。森を通りかかった王子が、これを知って、さっそく声色をつかって忍んでいく。虚偽申告に家宅侵入。これは立派な犯罪だが、言ってみればたんなる夜這い、これが積極的行為だとはとても評価の対象ではなからう。若い二人は一目惚れ。それは、不気味な魔法使いの婆さんよりは、若い男のほうがいいにきまっている。

ところが好事魔多し。二人の密会がばれて、ラプンツェルは長い髪を切られ、身重のまま、荒れ野に捨てられてしまう。王子は絶望のあまり塔から落ちて、茨のトゲで失明し、嘆きながら流離い歩くばかり。引き裂かれた二人はまた会えるのか。

メロドラマみたいな展開になる後半だが、驚くべきことには「箱入り娘」だったはずのラプンツェルは、過酷な条件下で信じられないタフさを発揮している。荒れ野で男の子と女の子を出産し、つつましい暮らしながらみごとに育てているのだ。ついでながら、子どもはふたごである。

王子がさまよいながら、運命を嘆き悲しむだけだったのに、ラプンツェルはサバイバルを生き抜いた。誰に教

えられたわけでもないのに、逆境で子どもを生み育てていく女性の逞しさをみのがしてはならない。物語の冒頭の。ロマンチックな塔での逢瀬のみに気をとられると、後半部の女性の強さをみのがしてしまう。

「恋人ローラント」(KHM 56)

これは女どうしのたたかひのお話。

いじわるなまま母(しかも魔女!)に命をねらわれた娘が、ホラー映画も顔まけの危機にであう。なにしろ夜中に母親がオノで首を切り落としにくるのだから。娘はいちはやく危険を察知して、恋人のローラントと手に手をとって逃げ出す。魔女が、あやまって実の子の首を切り落としたり、血のしずくが口をきいたり、たっぷり残酷性をふりまいているが、本筋はそのあとだ。

魔女はおそろしいスピードで逃げた二人を追ってくる。一足で一時間の道のりをすすむ靴をつかうのだ。娘は果敢に対抗手段をくりだす。盗んできた魔法の杖で恋人を湖に変え、自分はカモに変身して水のうえに泳ぎでる。

魔女は水が嫌いらしく手がだせない。すぐすぐ引き返した魔女。だが、翌朝あらためて襲ってくる。第二波攻撃も、イバラのなかにとじこめてメデタシメデタシなのだ。

が、それでもお話は終わらない。

問題は彼女の恋人ローラントなのだ。婚礼のしたくにもどったきりなしのつぶて。実は、悪い女にひっかかって、記憶を消され、婚約をしてしまうのだ。これだから男は信じられない。ポティックハイマーは、「貞淑な乙女と、不実な男」というサブタイトルは考えなかったのだろうか。

娘はこんどは、恋人奪還にたったひとりの戦いをはじめのりだった。羊飼いの家で家事の世話をしながら機会をうかがう。彼女を気に入った羊飼いが求婚しても、「恋人を思う心を変えず」、いよいよ恋人ローラントと悪い女と婚礼の日に、起死回生の記憶再生ソングともいべき歌をうたう。そこで、さすがの恋人ローラントも我に返る。「あれこそほんとうの花嫁だ。ほかのはいやだ！」

これで苦勞が喜びに変わったとお話の末尾には書かれているが、男がこんなでは、結婚後もまだ苦勞はつづきそうな気がする。

「あめふらし」(KHM 91)

グリム童話のなかで、いちばんのスーパー・レディは、

「あめふらし」の王女様ではないだろうか。聡明で、千里眼の超能力をもち、「氣ぐらいが高く、だれにもしたがおうとせず、ひとりて国を支配」するために、どんな求婚者もしりぞける。曰く、「自分にみつからないように隠れとおせるような人でなければ夫の資格はありません」彼女にチャレンジして失敗すると、首をはねられてお城のまわりにさらしものにされてしまう。その数九十七本。

王女は満足して、「これで一生のあいだ自由でいられるわ」と、ひとりごと。まあ、ふつうの男では相手にならない。

そんなとき、ダンゴ三兄弟ならぬ「獵師の三兄弟」がやってきて運だめしを申し出る。穴にもぐった長男。地下室にかくれた次男。二人ともたちまちみつけれ、あえなく九十八、九十九の杭のうえに。

美貌が売りの三男は、なんとか三回勝負をゆるしてもらい、カラスのタマゴのなか、魚の腹のなかにかくまってもらうが、それでも見つけれられてしまう。そして、最後に恩を売っておいたキツネの力をかりて、究極の大変身で王女様の目をくらませる。変身したのは、あんまり

みたことがないだろうけれど、「アメフラシ」という海ウシにいた海の生物。頭に耳のような二本の触覚があるので、ドイツ語では「海のウサギ」と呼ばれている。まさかの変身だから、さすがの王女様も気がつかず、時間ぎれのゲームセット。百人目にして、とうとう王女様は、猟師の若者と結婚する。若者は結婚してからも、けっしてキツネの力をかりて変身していたなんて告白しない。(本当の実力がバレたら怖い)だから、王女様は「夫にはかなわない。わたしより上手だわ」と、ずっと信じていたのだそうだ。この勝負、どっちが勝ったともいえないところに、人生のまことがあるような気がする。さらに、もっとよく読むと、まんまと王女をだました男、美貌なだけで、頭は悪いが、要領がよく、そのうえ、自分を助けて命を落としたカラスや魚のことを「まぬけだった」と後でくさするなど、とても嫌な男である。そういう男が成功するのが人生の真実であるという身も蓋もないが。

「こびら姫」(KHM 50)

受動的な女性の代表としていつも引き合いにだされる「いばら姫」であるが、次のように屁理屈で反論のしよ

うがある。

糸車のツムに指をさされて百年の眠りについ姫君。王様もお妃様も、家臣も、犬や蠅までもお城全体の時間がとまってしまふ。フェミニズム論者によれば、姫君はただ眠って、自分を起こしてくれる王子様をまっているだけの消極的・受動的な存在なのだそうだ。だが、お城をつつんでいたイバラの生け垣こそ、究極のお婿さん選別装置ではなかったか。運命の王子が現れるまで、城にはいろいろとしてイバラにひっかかり、命をおとした王子たちが数知れず。賢い者は眠って待つというが、あわれなのはのはきびしいチェックを受けて、あえなく命を落とした男たちだ。待つというのは、一見消極的行為にも見えるが、その時間的尺度によっては、あっさり主客転倒の価値をもってくる。オーストラリア大陸に、何十年後に起こるかわからない山火事を持って種子をふりまてい子孫を残す植物があるが、待ちつづけるには強靱な力が必要なのである。しかし、考えてみればこのお話の発端は、宴に呼ばれなかった十三人目の古い師の女の恨みだった。女性たちに始めから終わりまで振り回されて消耗するのはやっぱり男たちである。

「フィッチャーの鳥」(KHM 46)

美しい娘をさらって、妻にしては、開かずの間をのぞいてはならぬと約束させ、誘惑にかたずきに鍵をあけてしまった妻たちをつぎつぎに殺してしまふ、いわゆる青髭のお話だ。開けてびっくり血のたらい。死体の山。

だが、「フィッチャーの鳥」の娘は、だまって殺されたりはしない。先に殺された姉たちを生き返らせたり、青髭男を言葉たくみにまるめこんで、留守になったすきに、羽根ぶとんの羽をからだにはりつけて奇妙な鳥に大変身。姿を変えて逃げ出したばかりか、男の仲間の悪党どもをおびきよせ、家に火をかけて、一網打尽の害虫退治もやってのける。力づくの男には知恵で対抗するしかない。

「マレーン姫」(KHM 198)

恋する王子のために、父王のすすめる縁談をことわって、怒りをかい、日のささぬ塔のなかに七年間も幽閉されたマレーン姫。七年のあいだに父の王国は滅び、助けしてくれる人もいなくなった。マレーン姫は侍女といっしょにパンきりナイフひとつで、固い石の壁をけずり、気の遠くなるような脱獄を果たす。なみの粘り強さではな

い。

外へ出たところで味方はいない。さすらいの果てに、ある国のお城の料理番にやとわれて、下積みプロレタリアート生活に耐える。まさに耐える女の生涯のようなお話だが、長い時間をかけてみずからの運命を切り開いたマレーン姫のまえに最後にたちはだかるのは、王子の婚約者の「みにくい姫」だった。メルヘンでは「悪人は外見もみにくい」というようにわかりやすいが、「美しきもの必ずしも善ならず」というドイツの諺もあることをつけくわえたい。さらに、女の敵は女なりという成句も。以上は、グリム童話の女性は受動的という見解への反証としての引用であるが、これさえも、二一〇編あるメルヘンのなかで、そういう傾向にあるお話の選択にすぎない。もともと、ある意図のもとに傾向をそろえて集めたわけではないメルヘン集である。ただ命題を無効化してみただけである。

4 アメリカの「赤ずきん」

一九四一年に、アメリカでグリム童話をもとにした絵本が刊行されている。⁽²⁾

原題 Little Red Riding Hood。まぎれもなく「赤ずきん」(KHM 26)である。ペローの作というフランス版「赤ずきん」もあるが、狼が退治されるストーリーはグリム以後であるから、グリムに典拠をとっていると考えられる。

グリム童話が外国で翻訳出版される際に、とくに子ども向けの絵本などでは、その国柄によって設定や細部の変更削除などがなされるのは珍しくない。しかし、「赤ずきん」は単純なストーリーであるし、変更すべき問題箇所といえ、年取って病気のお婆さんを森のはずれでひとり暮らしさせているということぐらいで、それに文句をつけたら、お話自体が成立しなくなる。

一九四一年というまさに第二次大戦中のアメリカの子どもむけの絵本のなかで、「赤ずきん」がどのように描かれていたかたいへん興味ぶかいものがある。赤ずきんの衣装はフード付きのローブ (A red cloak and hood) である。グリムの原典にない書き加えとして、お婆あさんの家に行く前に、母親から自分のたべるぶんのクッキーをもらおうというのはご愛嬌である。そのクッキーを森であったコマドリに分け与えてもいる。(ここに伏線

がある) お約束どおり、赤ずきんは森のなかでオオカミに出会う。オオカミはシルクハットにモーニングの正装で、たいへな紳士的である。グリム童話では、オオカミは赤ずきん寄り道をさせようと言葉たくみにささやくが、アメリカのオオカミはお婆さんの家までどちらの道が近道が競争しようともちかける。赤ずきんは寄り道せずに、まっすぐお婆あさんの家にむかうことになった。もちろん先に到着するのはオオカミであったが、お婆あさんの家にとびこんだオオカミは、お婆あさんに逃げられてしまふ。お婆あさんはキッチンに逃げ込み鍵をかけてしまふのだ。オオカミはお婆あさんの眼鏡とナイトガウンを使って変装し、ベットで赤ずきんを待つことになる。やってきた赤ずきんとのやりとり、「お婆あちゃん、なんて大きなお耳なの?」はくりかえされ、「なんて大きな歯なの?」を合図にベットをとびだして襲いかかるオオカミ。赤ずきんは、当然、オオカミに呑みこまれてしまうことになるのかとおもうと、森からついできた例のコマドリが急を知って、赤ずきんの父親を呼んでくる。(通りがかりの獵師ではない) 父親はライフルをかまえて、とびこんできてくれるのだ。Quickly he raised his gun

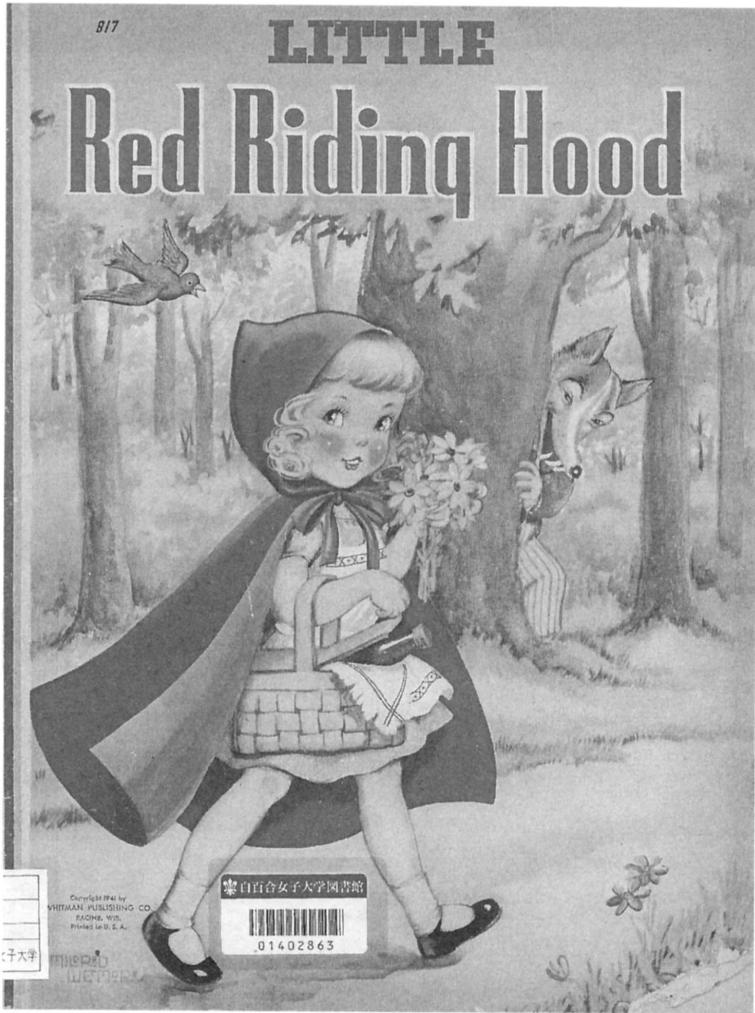
and shot the bad wolf. 「パパはいそいで銃をかまえる
と、悪いオオカミをうちました」というわけである。キ
ッチンにかくれていたおばあさんも、鍵をあけて出てき
て、「おやまあ、おまえ、疲れたらうね。おなかも空い
たらう」といって、パパと赤ずきんとおばあさんの三人
で、ランチを食べることになる。食事がすむと、赤ずき
んとパパはおばあさんに Good-bye といって、いっしょ
に家に帰っていく。それだけである。オオカミのおなか
がふくらんだり、それを切り裂いて赤ずきんがとびだし
たり、石ころをつめてオオカミを殺したりの見せ場はす
べてカットされている。四十年代アメリカの子ども絵本
のための、ある種の基準からはずれるものは、容赦なく
削除されている。妊娠と帝王切開を想像させる設定はま
ずいとも思っただらうか。そして、さすがは自分の
身は自分でまもるガンの国アメリカらしく、父親がライ
フルをもって助けにくるのであるから、首尾一貫した変
更である。『政治的に正しいおとぎ話』の著者なら、さ
らに、オオカミは麻醉銃で眠らされ、捕獲されて檻にい
れられ、裁判にかけられて収監されるか、自然保護区へ
移送されるかすところだろう。

アメリカナイズされたグリム童話としては、ディズニ
ーがよく引き合いにだされるが、この四一年版、アメリ
カ「赤ずきん」は、貴重なサンプルである。

以上の例は、特定の意図をもって紹介したわけではな
い。どの国でも、いやドイツでも、グリム童話をそれぞ
れの時代や地域で、それぞれの事情で得手勝手に変更削
除改編してきたのである。もともと、メルヘンそのもの
が一字一句も変更されずに伝えられてきたものではなく
て、語り手の語り口で微妙に変化してきたものであろう
し、その変化にこそ、人間の精神活動のありようを知る
手掛かりとして興味深いものだといわねばならない。こ
れが私がグリムをめぐる現象学をつづける理由である。

(1) Brüder Grimm, Kinder und Hausmärchen, Nach
der Großen Ausgabe von 1857, hrsg. von Hans-Jorgen
Uther, Eugen Diederichs Verlag, München 1996. を参
照した。

(2) Little Red Riding Hood: Mildred Wetmore, Ra-
cine Wis, Whitman Publishing Co. 1941. Printed in U.
S. A. 図版⁹⁹。



アメリカ版「赤ずきん」絵本, 1941年.



THE robin who had followed Red Riding Hood to the cottage had gone to find help.  So when Red Riding Hood ran toward the door she saw her own father there.  Quickly he raised his gun and shot the bad wolf.  "But where is Grandmother?" asked the puzzled little girl, looking around.   

後方の窓からショットガンを持った父親が助けに来る。